なのはな通信

26 年度　六ツ美中部小学校
校長室だより　№.7
平成 26 年 7 月 9 日

「すてきな一歩」

長井　理佳　作詞
長谷部匡俊　作曲

友だちと今まで以上に仲良くなるには、心を伝え合うことが大切です。

『家庭・学校・地域とのつながりを深めよう　～すべては子供たちのために～』

「中日春秋記事から」

〈パーマネントに火がついて／見る見るうちに禿（は）げ頭／禿げた頭に毛が三本／ああ、恥（はず）かしや恥かしや／パーマネントはやめましょう〉。戦争中こんな囃（はや）し文句が流行した。

◀「われら腕白（わんぱく）どもは隊伍（たいご）を組んで町を闊歩（かっぽ）しながら、パーマの麗人を立ち往生させ、ぐるぐる回りながらはやしたてた」。作家の半藤一利さんが『荷風さんの昭和』（ちくま文庫）の中で、書いている。

◀時局柄、「婦女のちぢらし髪」は禁止。子どもは純粋だが、純粋とは一面、情けを知らぬ容赦のなさでもある。禁止のはずの「ちぢらし髪」をからかうことに、ためらいはなかっただろう。

◀同級生へのいじめを見かねた小学校三年生の女の子が「いじめるなら、私をいじめろ」とかばった。三人の子は「いじめてもいいんだって」とかばう子をたたき、けがをさせた。

◀いじめられた子を心配する。我（われ）先の時代にあってかばった女の子の優しさに手を合わせたくなる。その一方でいじめた三人が気掛かりである。

◀「自分をいじめろ」の言葉を聞けば、大人なら感に打たれてひるむだろうが、相手は小三である。子どもの容赦のなさが出てしまったとはいえ、ひどい子とは思えぬし、思いたくもない。大人の尺度で測ってはならぬ。大切なのはこれから三人にどう教えてあげるか。「いまはひどくきまり悪く思っている」。半藤さんは囃し文句を反省している。

□豊橋で起きた事件の担任は新任ですが、大人であり、情けを知らない子供とは違います。しかし、いじめを見抜く力がなく叱る経験が乏しかったのではないでしょうか。条件付採用という研修の期間でもあり、拠点校指導員や校内指導教員が指導しています。難関を突破して採用されたはずであり、未来を担う子供の先生となるための資質を備えられるように、多くの教師がかかわり、支え、育てていくことが必要です。日々実践し、指導力を身につけ、子供の伸びる芽を育てていかなければなりません。教師も成長する時間が必要です。

教育は、家庭と学校と地域が密につながり、子供を成長させていく尊い営みです。人を育てるのは、人であり、信頼される人に育てたいのです。

ＥＳＤの実践

六年生「ＪＡ営農課長伊奈様のお話を聞きました。岡崎市の食料自給率は、一〇％だそうです。

ＦＢＣ秋花壇

緑化委員会の人たちによって、サルビアやアゲラタムなどの苗が植えられました。潅水・除草の世話は大変ですが、きれいな花が咲くといいですね。